

特集 シンポジウム報告

# 「文明間対話」サテライト・シンポジウム：「環境と文明」

シンポジウム実行委員会

平野葉一 \*1, 中嶋卓雄 \*2, 田中彰吾 \*3, 安達未菜 \*4 (事務局)

\*1 東海大学文学部, 文明研究所, \*2 東海大学理系教育センター, \*3 東海大学スチューデントアチーブメントセンター, 文明研究所

\*4 東海大学文化社会学部

## Symposium Report: Environment and Civilization

### Executive Committee

On December 8, 2021, Tokai University's Institute of Civilization Research held "Environment and Civilization," the satellite symposium of the "Symposium on Dialogue between Civilizations," organized by the institute since 2016. In modern civilization, the environment is one of the most pressing issues on a global scale. In fact, nowadays global climate changes and the resulting natural disasters are becoming even more severe; in 2021, ICPP confirmed that global warming is rooted in human activities. Therefore, it is necessary and even crucial to understand human coexistence with nature. Focusing on sustainable coexistence, the symposium discussed how human civilization should deal with the natural environment in the future, that is, using an interdisciplinary (even transdisciplinary) perspective. The symposium was organized as follows:

Opening address:

Kazushige Yamamoto (Director, Institute of Civilization Research, Tokai University)

Keynote lecture:

Mitsuyuki Okamoto (Director, Kyushu Regional Environment Office)

"Aiming at the carbon neutrality and Satoyama Initiative" (read by the coordinator according to the situation)

Related report:

Takuo Nakashima (Professor, STEM Education Center, Tokai University)

"Thinking of the resilience in the modern society, from a viewpoint of the concept of bricolage"

Related report:

Shogo Tanaka (Professor, Student Achievement Center, Tokai University)

"On landscape: The imagination of humans living in nature"

Coordinator:

Yoichi Hirano (Professor, School of Letters, Tokai University)

Through the keynote lecture and the two related reports, the floor and panel were engaged in a lively discussion. Finally, the symposium concluded with indigenous wisdom as a key concept. Here, indigenous wisdom signifies the "traditional wisdom" or "tacit wisdom," which has been originally cultivated from its relation with people's activity in their local region or even in more global areas. Thus, it was demonstrated that human traditional and tacit wisdom must be applied to human activities, even during modernization, for sustainable human coexistence with nature.

## はじめに—シンポジウムの趣旨と構成

東海大学文明研究所では 2016 年度から 2019 年度ま

このシンポジウム Dialogue between Civilizations は第 1 回 (2016 年度) ~ 第 4 回 (2019 年度) が, デンマークの東海大学ヨーロッパ学術センターにて開催された。

で国際シンポジウム Dialogue between Civilizations (文明間対話) を開催してきたが, 昨今の Covid-19 の感染症蔓延に伴い, 2020 年度から開催を中止せざるを得ない状況であった。そうしたなか, 2021 年 12 月 8 日にサテライト・シンポジウム「環境と文明」を開催するに至った。本稿では, 本シンポジウムの趣旨について紹介

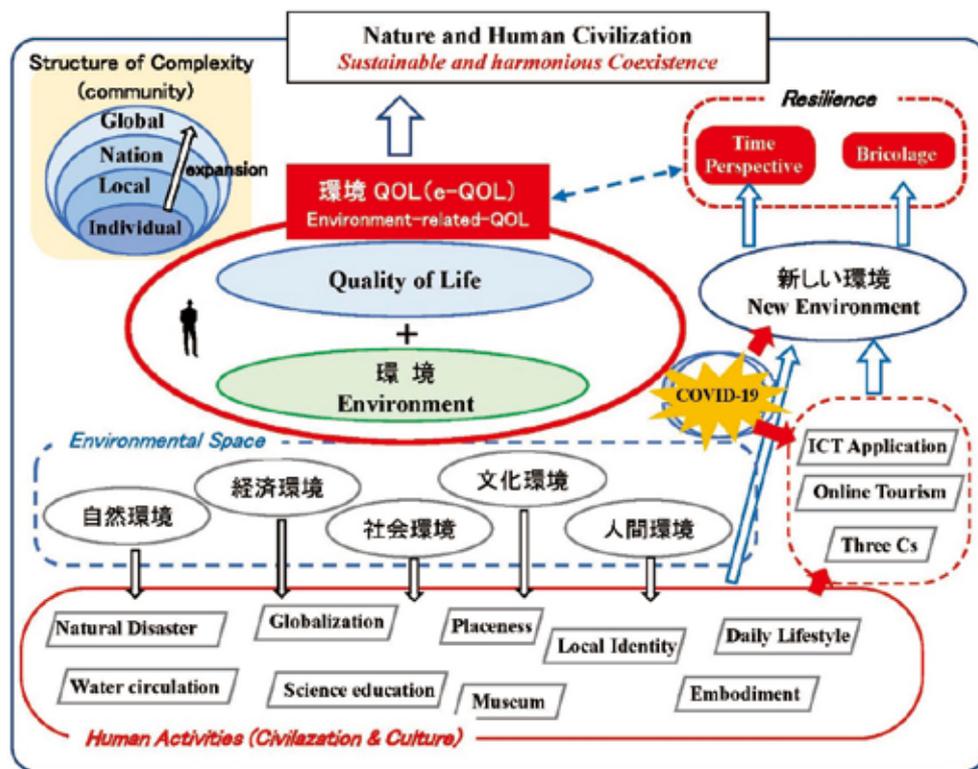


図 本シンポジウムの《概念図》

し、またシンポジウムの講演内容等について報告する。

先ず本シンポジウムの趣旨であるが、これは最近とくに活発な議論がなされている地球環境問題に起因する。

東海大学文明研究所では文明の諸相に対してさまざまな学問領域から検討を進めてきた。なかでも現在の環境を取り巻く問題は地球規模での活発な議論が展開されているが、昨今の COVID-19 の蔓延も重なってわれわれの日常生活をより困難なものにしている。今回のシンポジウム開催はこうした問題にも起因する。

現代文明を考えるうえで環境問題は喫緊の課題である。昨今の気候変動およびそれに起因する自然災害を考えても状況は日々深刻になっている。2021 年になって ICPP は地球温暖化を公に表明したが、現在では人間と自然との sustainable (持続可能) な共存に向け、例えば世界規模で脱炭素化の加速などさまざまな対策が検討されている。こうしたなか、田中は 2015 年に東日本大震災からの復興を環境の視点から展望する「復興のランドスケープ」を発表し、平野・中嶋は 2017 年以降「環境 QOL」概念を導入して人間自らが生活する空間の環境を保持することでいかに自らの存在—生きることの質—に満足を感じるか、そのための指標の提起を試みてき

た。文明研究所におけるこうした研究は、文明を構築してきた人間が直面している問題へのアプローチの一つである。

実際、最近のグリーンランド高地での観測史上初の降雨、大西洋南北熱塩循環 (AMOC) の停滞の兆しなどの報告を考えれば、自然環境の問題について科学技術を軸に検討することは不可欠である。しかし、それと同時に自然を人間の文明営為、文化営為との関りから検討することもまた重要である。人間が身の回りの自然を認識し、理解することは、個人および個人が属する社会集団の文化営為である。それ故に、自然との対峙も含めて人間にとっての「ランドスケープ」や「環境 QOL」が対象とする環境は、自然環境に留まらず社会的、文化的環境をも意味することになる。

今回のシンポジウムでは環境に関連する個別な問題の前提として、人間の文明が自らを取り巻く環境に対してどのように立ち向かっているのかを学際的視点から考察し、人間の文明と自然の調和ある持続的な共存の可能性について検討することを目的に開催されるに至った。その趣旨を表したのが上の《概念図》である (上の【図】参照)。これは、昨今の COVID-19 も含めた人間を取り

巻くさまざまな環境に対し、人間が自らの努力によって新たな環境—人間と自然が sustainable な共存を果たせる空間—の創造を目指し、そのための一つの方向性として resilience（復興力）の重要性を検討する図式を描いたものである。

こうした趣旨に鑑み、本シンポジウムでは基調講演として九州地方環境事務所の岡本光之所長をお招きし、これに二つの関連研究報告を加えて全体を構成した。

**開会挨拶：**

山本和重（東海大学文学部教授・文明研究所所長）

**基調講演：**

岡本光之（九州地方環境事務所所長, 東海大学客員教授）  
「カーボンニュートラルを目指す時代と里山イニシアティブ」

**関連研究報告：**

中嶋卓雄（東海大学理系教育センター教授）

「現代社会の resilience を考える—bricolage の視点から」

田中彰吾（東海大学学生アチーブメントセンター教授・文明研究所）

「ランドスケープを考える—自然を生きる人間の想像力」

**コーディネータ：**

平野葉一（東海大学文学部特任教授・文明研究所）

今回は昨今の事情により Zoom を用いたりリモート開催となったが、20 名程の参加者があった。なお、今回は岡本氏が直前に体調を崩されて参加が不可能になったため、岡本氏から送付された講演原稿をコーディネータの平野が代読し、また必要に応じて補足する形で基調講演を進めた。

本シンポジウムの報告として、以下に各報告内容について掲載する。これらは、当日の研究報告を録音したテープをもとに、当日の口頭報告を尊重する形で各報告者が原稿に起こしたものであり、文責を含め報告内容は各報告者に帰属するものとする。また、基調講演に関しては代読者が補足も含めてまとめたものである。なお、各報告後に活発なディスカッションが行われたが、これに関しては「あとがき」にまとめてある。

なお、本シンポジウムは東海大学文明研究所の主催であるが、同時に、東海大学文学部および東海大学大学院文学研究科、環境省・環境研究総合推進費（S II -5）プロジェクトの協力の下で開催された。

